
主な著書論文紹介

船尾日出志(愛知教育大学)

わたしの論文・著書・翻訳書から執筆年代順に11点(ベストイレブン)を選んで、コメントさせていただきます。軽く思い出もまじえながら。

1) 「社会科教育学」批判序説 — 「社会科学とかかわる教科科学」の確立に向けて(大阪教育大学社会科教育教室『社会科教育紀要』 1971年3月刊)

コメント:学部の2年生のときに執筆しました。学術雑誌に掲載された最初の論文です。「教科教育なんて学問じゃない」と言われていた時代に、学問としての教科研究が必要だということを、いわばアジテーションしたものです。表題も、内容も、カール・マルクスの「ヘーゲル法哲学批判序説」を模した若気の至り100%論文です。

2) ドイツ帝国主義・軍国主義の教科政策と教科方法学の歴史 — 第二帝政期における「階級調和」への教育の理論と実践(大阪教育大学紀要第22巻, 1974年2月刊)

コメント：卒業論文（1973年3月）の一部を大学の紀要に論文として掲載していただきました。卒論研究ではヘルムート・ケーニッヒの『ドイツにおける帝国主義と軍国主義の教育 1870-1960』とホルスト・ディーレの『ドイツ帝国主義に奉仕した右派社会民主党の学校政策 1918年から1923年までのプロイセン中等学校における歴史教育』の2冊を底本としました。それぞれ200頁を超える本でしたが、ドイツ語の（当時のわたしにとっては）難しい文章を読解できたときの喜びを味わいながら読み進めました。

3) 就学前教育・幼年学校史（学文社、1991年3月）

コメント：研究室に届いた十数冊のドイツ語図書を整理していたとき、どういうわけかユルゲン・シェーフアーさんの『就学前教育の歴史』が気になりました。妙にひきつけられたのです。この本を翻訳して出版したいと思ったのです。たぶん、当時小学校低学年への生活科導入が話題になっていたことがベースにあったのだと思います。生活科教育の理念や理論を確かなものになりたいという気持ちがあったのだと思います。翻訳原稿ができあがったとき、名古屋市内に本社のある某出版社に刊行をお願いしたのですが、つれない返事でした。ですので、東京の学文社から「出版します」と返事をいただいたときは、うれしかったです。この本は結局3刷まで刊行されました。その後、学文社さんとは長い付き合いをさせていただいております。

4) 生活世界に迫る教育 — 安城市立今池小学校からの報告（学文社、1994年11月）

コメント：我が家の子どもたちが通っていた今池小学校の先生方とは、必然的に親しくなりました。優秀で、熱心な先生方ばかりでした。何より子ども思いの先生方でした。授業参観やさまざまな行事見学を通して、先生方の実践を全国に紹介したくなりました。同校の当時の教頭先生をはじめ、諸先生方の頑張り、とりわけ教務主任（当時）の加藤善亮先生のご尽力で刊行できました。総合的な学習の時間を先取りした実践は全国的に高い評価をいただきました。わたしは編集と序章を担当しました。自画自賛ですが、序章は我ながら良い文章だと思っています。

5) パウル・エストライヒ — 徹底的学校改革者同盟の歴史教育・平和教育（学文社、1996年3月）

コメント：パウル・エストライヒの名前を初めて知ったのは、卒論研究の基本資料としたホルスト・ディーレの著書を読んでいるときでした。ワイマル共和国（1919-1933）は周知のように、当時としてはきわめて民主的な憲法を有していたのですが、非常に不安定な国家体制でした。「共和主義者のいない共和国」とさえいわれていました。そのような状況の中で一貫して、ワイマル共和国を守るための教育運動、学校教育改革に努めたのがエストライヒとかれが率いた徹底的学校改革者同盟でした。初めての単行本です。

6) 教科教授の法則性と人間性の教育 — ドイツ民主共和国における哲学的教育学研究の反省的考察（風間書房、1999年2月）

コメント：1998年度文部省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）をえて刊行しました。東ドイツ（1949-1990）という「共産党」一党独裁体制の国家のもとでも、教育者、哲学者としての良心を守ろうとした人々の思想や理念を、諸論文の行間から読み取る作業の結果をまとめました。ここで紹介した旧東ドイツの哲学的教育学者たちの多くは、再統合後のドイツの教育学界においても活躍しています。550頁の大著を単行本として出版できたことに、自分でも信じられない気持ちでした。

7) 過去をみる見地 — 生活と体験に迫る歴史学習の試み (学文社, 1999年2月)

コメント:1995年にドイツで刊行されたヨヘン・フーン編著の『過去をみる』を購入し、読み始めたとき、どうしても翻訳して出版したくなりました。旧東西両ドイツの歴史教育の研究者および実践家たちによる共同研究の成果は、ドイツにおける冷戦終了後の新しい教育の在り方を示していると思ったからです。土屋武志先生が提言なさっている解釈型歴史学習に通じるものがあると、わたしは解釈しています。

偶然ですが、1999年2月には2冊出版できました。このときばかりは、次々著書を刊行なさっていた寺本潔先生の気分でした。

8) 学びを支える — 安城作野小学校の実践 (学文社, 2002年8月)

コメント:市川正孝先生が籍をおいていらっしゃった安城市立作野小学校の全教職員と一緒に数年間共同研究をおこない、刊行しました。その際、リーダーシップをおとりになったのは、もちろん市川先生です。この本も、総合的な学習の時間のモデル的实践として全国的に評判になりました。市川先生が執筆なさった38頁(第4章第1節)は秀逸です。

9) 子どものための教育 — 徹底的学校改革者同盟教育研究大会(1932年)報告『子どもの苦難と教育』より (学文社, 2004年3月)

コメント:愛教大に赴任してからパウル・エストライヒと徹底的学校改革者同盟については研究を進めていました。その一環として、ワイマル共和国がナチスによって崩壊させられる直前に開催された徹底的学校改革者同盟の研究大会の記録の主要部を翻訳し、改題を付して刊行することにしました。わたし自身、この本への愛着は格別に強いです。

10) 哲学の根本問題 — 真理と権力のせめぎ合いのなかで (学文社, 2009年4月)

コメント:2006年9月末にオリバー・マイヤー先生の研究室で初めてラインハルト・ヘッセ先生とお会いしました。ヘッセ先生は卓越した哲学者であることは確かですが、同時に気さくで、ユーモラスで、そして優しい人間性をお持ちです。そのようなヘッセ先生から入門書的な哲学書を執筆中であることをお聞きし、和訳して日本で刊行することを提案しました。したがって原稿をいただいたのはかなり後のことになります。2008年4月から附属学校の校長になったこともあり、かなり過酷な作業になりましたが、何とか出版できました。この本は、その後、ドイツ、イギリス、ロシア、ブラジルでもそれぞれの国の言葉で刊行されました(それぞれの序文にわたしへの謝意が書かれています!)が、日本語版が世界で最初に出版されたのです。いまでもヘッセ先生とは家族ぐるみのお付き合いをさせていただいております。

11) 幸せの門がある学校 — 子どもたちとともに育ち、育てられた養護学校長の体験と学び (学文社, 2012年10月)

コメント:2008年4月から3年間、愛教大附属養護学校で仕事をさせていただきました。しかし当初、わたしは知的障害についても、特別支援教育についてもほぼ何も知らなかったのです。それゆえ、その分野に係るドイツの研究成果を読みつつ、子どもたちと教職員を観察しながら、一步一步学びを進めました。そして学びの記録の一部を単行本として刊行したのです。出版後、同校でお世話になった教職員および保護者の方々に謹呈したのですが、卒業生A君の母親から次のようなメッセージをいただきました。「Aは船尾先生の本を毎晩、抱いて寝ています。」